

風間真一様三回忌追悼の記念講話

蓑輪 顕量

本日、風間真一様の三回忌に出席させて頂き、簡単なお話をさせていただく機会を頂戴いたしました。風間真一様は昭和2（1927）年、10月5日に鶴岡の地主であった風間家にお生まれになられました。昭和22（1947）年、学習院高等科文科丙類を卒業され、昭和29（1954）年、東京大学法学部政治学科を卒業されております。庄内銀行の第三代頭取を務められた嘉一郎様が急逝された後、家督を継がれておりましたが、東大法学部を卒業後、庄内銀行に入行され、取締役を務められました。なお、生前に真一様はお父様の逝去により急に故郷に戻らざるを得なくなったことを大変残念に思ったと話されていたことを思い出します。昭和29（1949）年には財団法人克念社の理事長になられ、その後、その要職を勤められるとともに、1963年以降は金谷興業の会長、1970年以降は学校法人鶴岡学園の理事長も務めておられました。平成3（1991）年以降は、鶴岡商工会議所の会頭を、平成20（2008）年からは庄内銀行の相談役を務めておられました。このような要職をこなされつつ、腎臓の持病をお持ちで養生をされていたとのことですが、体調を崩されて入院治療、しかし薬石効なく平成22年11月21日に御浄土に旅立たれました。入院されてからわずかの間体調が悪化され、急逝されたとの報に接した二年前のことを、昨日のことのように思い出します。

さて、風間様のご先祖様のことを少しお話したいと思います。風間家の祖先は、越後国沢海藩（そうみはん）（現在の新潟県中蒲原郡横越村）の武士であったと伺っております。村上から酒田に移り、鶴岡には18世紀後半に移住され、創業は安永8年（1779）のことと聞いております。鶴岡城下の五日町（現在の本町一丁目）で庄内藩の御用商人として活躍、幕末には鶴岡第一の豪商となっていました。

明治時代、銀行業に転じ、庄内地方を代表する大地主に成長、しかし、利を追求するだけではなく、その一方で、児童福祉などの慈善事業や幼稚園経営を支援し、また、学問の拠点としてご縁のあった東京大学文学部、インド哲学科への支援を行うなど、大きな社会還元、社会貢献をなさってこられました。昭和20年代には丙申堂で女子教育を行ったとも聞いております。

さて、風間家にはご存じの通り、二つの重要な建物があります。「丙申堂」と「無量光苑釈迦堂」です。「丙申堂」は、明治29年（1896年）丙申（ひのえさる）の年に、風間家7代当主、幸右衛門様が、住まいと営業の拠点（店舗）として建立されました。

主屋を中心に、南側は道路に面し、薬医門と複数の蔵があり、座敷や茶の間など、部屋数は19室、広大な和室や板の間、大黒柱が当時のままに残ります。この建物は、明治27年の酒田地震を教訓にして建てられたと伝えられ、広い板の間にかかる梁を三角形にするなど、工夫のあとが見られます。平成8年12月に主屋、同11年6月に表門・各蔵・板塀などが、国指定登録有形文化財に指定されました。1年半後の平成12年12月には、主屋・各蔵・トイレ、浴室などが国指定重要文化財となりました。

「無量光苑 釈迦堂」は、丙申堂より約50m北側に位置する建物です。良質の杉材を使った数寄屋風建築で、明治43年（1910）、丙申堂の別邸として建てられました。主に来

客の接待に使われた「もてなしの館」です。構造や意匠に優れ、別邸建築を考える上で貴重な資料であり、2002年2月、国の登録有形文化財に指定されました。

風間家は代々、浄土真宗への信仰が厚く、創建時から「無量光」の額がかけてあったことから、八代目当主・幸右衛門様が建物と庭園を合わせて「無量光苑」と命名されました。さらに、真一様が、床の間に御石仏 釈迦像を安置して「無量光苑 釈迦堂」と命名されました。このお釈迦様の石像は、大正12年、東京帝国大学の常盤大定先生より寄贈されたものと伺っております。

実は、真一様がお元気でいらっしゃった平成8、9年頃、当時、大阪市立博物館の学芸員であり、現在は大阪大学大学院文学研究科教授の藤岡穰先生と、この石仏の釈迦像の調査をさせていただいたことが、懐かしく思い出されます。その時、藤岡先生は、断定は出来ませんがまず間違いなく中国から将来されたものでしょうとのことを述べておられました。

風間家は代々、浄土真宗の信仰に厚かったと聞いておりますが、それは風間家の祖先が新潟の出身であった、ということに起因しているのではないかと思います。

鎌倉時代の初期、浄土真宗の開祖、親鸞聖人は、法然聖人の弟子になりましたが、師ともども比叡山天台の訴えにより、朝廷より念仏停止の憂き目に遭います。やがて朝廷の内部に起きた事件に巻き込まれ、流罪になります。これを建永の法難(1207)と申しますが、この時、法然聖人は土佐へ、後に変更され讃岐になりますが、流罪になりました。親鸞聖人は越後、現在の新潟県に流されます。赦免後、親鸞聖人は関東に拠点を築きます。これが坂東二十四輩と呼ばれる寺院に発展しました。いずれにしろ、関東から信濃、越後にかけて、浄土真宗の教えが、広まることとなります。新潟には浄興寺が創設され、越後、信濃、出羽の地域に末寺を随える大寺となりました。

出羽の国と越後の国の関係は古く、もともと出羽の国は越後の国の中に置かれた「出羽郡」から出発しますが、奈良時代の始めには、出羽の国となりました。日本海を利用した海運の利を生かして、密接な関係が築かれたものと推測されます。おそらく新潟から、山形、秋田にかけての信仰は、海運とのつながりが、強く関係していたものと思われる。

風間家も、おそらくはそのような歴史的な背景のもと、浄土真宗の信仰に親しく接し、熱心な信者となったのではないかと思います。

浄土真宗の信仰は、阿弥陀様への絶対的な帰依に特徴を持っております。師の法然聖人の教えでは、末法の時代に唯一、凡夫に実行できるものは、ただ「南無阿弥陀仏」と唱えることだけだ、念仏こそが唯一のふさわしい行(正行)であると主張しました。法然の聖人のお言葉の中では「念仏を先とする(念仏為先)」との表現が残されています。お念仏を唱えることによって阿弥陀様の浄土である極楽世界に往生することができるかと主張したのであります。ですから、法然上人の教えの中には、まだ行的な側面が残っているように思われます。

一方、親鸞聖人の教えでは、阿弥陀様が、まだ法蔵という名前の菩薩であった時に立てた本願を重視します。この本願は全部で四十八箇条あり、四十八願と呼ばれるのですが、中でも親鸞聖人は、第十八願を重視しました。その願の内容は、「世の中の生きとし生ける者がすべて悟りを得るのでなければ、私は悟りを取らない」というものでした。やがて

法蔵菩薩は悟りを開いて阿弥陀様になります。つまり、先に立てた本願は、すべて成就したことになります。親鸞聖人は、ここを重視されて、阿弥陀様の本願を信じることもっとも大切なのだと主張しました。

ですから、本願に対する信が確固とした時、すなわち決定したときに、極楽への往生は確約されるのだと考え、「信」をもっとも大事なものと位置づけました。この点を重視して、親鸞聖人の教えは、信心をもっとも大切なものとする教え、「信心為本」の教えだと呼ばれるようになりました。

では、信心をもっとも大切ということになりますと、信じる事が出来たら後は何もいらぬ、ということになるのは当然の成り行きです。南無阿弥陀仏と唱えることすら、必要ないのでは、という疑問がすぐに起こります。これに対し、お念仏は阿弥陀様への感謝のために唱えるのだ、という位置づけがなされるようになりました。

さて、江戸時代になりますと、浄土真宗の信仰を見事に語る市井の人が登場します。この方々は妙妙人と呼ばれるのですが、その方の一人が詠まれた有名な句があります。それが「何事も あなたまかせの 南無阿弥陀仏」というものです。この歌は自己の計らいを棄てて、すべてを阿弥陀様にお任せするという、浄土真宗の信仰を、見事に詠い切ったものです。何があっても何が起きても、それを阿弥陀様のお計らいと考えて、真つ正面から受け止めていく、ということです。

この心の有り様は、実は仏教の伝統的な修行である「観」と呼ばれる実践から、最終的に行き着く境地とほぼ等しいと思います。自らの身に起きた出来事に対し、憂い、悩み、苦しみを起こさずに、ただ受け止め、対処していく、そのような生き方を、すべてをお任せすることから可能にしているように思います。

さて、風間家のお住まいは、「丙申堂」「無量光苑 釈迦堂」と呼ばれていますが、この呼び名の中に「堂」という文字が入っていることは、その信仰の表れのひとつと申せましょう。奈良、平安時代において、寺院の主要な建物は「堂」という名称で呼ばれていました。たとえば、仏様専用のお堂は「金堂」と呼ばれ、僧侶の方々が学び、講説をおこなう建物は「講堂」と呼ばれておりました。

中世の鎌倉時代になりますと、中国から新しい仏教として禪宗が将来され、建物の名称にも新たな呼び方が登場します。従来の金堂と同じ役割を果たす仏様のための建物は、「大雄宝殿」と呼ばれ、説法をする建物は法堂と呼ばれました。また、その時代に登場しました新仏教の諸宗では、仏様専用の建物と、一般の人々の法を聞く建物とが一体となり、「本堂」と呼ばれるようになりました。

このように、仏様を安置する建物や教えを聞くための建物の「堂」という文字が使用されることが多いのですが、風間家が建立した建物にも、「丙申堂」「釈迦堂」と堂の名称が使用されています。このことは、そのたてものが宗教的な営みと関連していることを彷彿させます。また、漢語としての「堂」は、高い土台の上に築かれた御殿の大広間の意味です。まさしく寺院のように、多くの人々が集える建物が「堂」であったのです。

したがって、風間家の建物の堂という名が付されたことには、「人々が集うこと」や「宗教的な信仰」が含意されるという二重の意味合いがあったのではないかと想像されます。釈迦堂には「無量光苑」という冠の言葉が付いていますが、無量光は、阿弥陀様の別

名であり、まさしく阿弥陀信仰を物語るものでもあります。

また、代々、風間家様には聖徳太子に対する篤い信仰が続いているとも伺っております。昨今は、歴史学の分野から、聖徳太子は存在しなかったというセンセーショナルな見解が出され、世間をお騒がせしたことはご存じの方も多いと思います。これは、「聖徳」という名称は諡（おくりな）であり、その名称が正史の上に登場するのは、8世紀以降のことであり、太子の事跡は、道慈という留学僧の考え出したものであろうという見解でした。

しかしながら、7世紀初頭に、十七条憲法や冠位十二階の制定など、日本の国にとって最初になる、重要な出来事を中心になって行った人物がいらっしやったこと、仏典の講説のために注釈書を、渡来の方々とともに作成されたこと、その方が亡くなった後、天寿国繡帳と呼ばれる立派な錦の織物が製作されたことなどは、否定することができません。「聖徳皇」という名称そのものが、8世紀の初頭の資料に現れる諡であって、ご本人が生きているときに使われていなかったことは当然でしょうが、だからといって、その人物の存在までも否定することは、少し行き過ぎではないかと考えています。

さて、その聖徳太子に対する信仰は、平安時代半ば過ぎから盛んに行われるようになっていきました。ところで、聖徳太子ゆかりの寺院として有名なところは、奈良の法隆寺と大阪の四天王寺です。現在はこの二つとも大変に有名ですが、聖徳太子信仰は、歴史的には、四天王寺を拠点として形成されたものだと考えられています。

この聖徳太子に対する信仰は、浄土真宗の開祖になられる親鸞聖人も、お持ちになっておられました。親鸞聖人の著作の中には、人々に教えを広めるために、平易な日本語でしたためたものが数多く残っており、その代表的なものが和讃と呼ばれるものです。『浄土和讃』『正像末和讃』『高僧和讃』などが知られていますが、聖徳太子に対する和讃も、数多く存在します。たとえば、『正像末和讃』の中に「皇太子聖徳奉讃」として11首、『皇太子聖徳奉讃』に75首、『大日本国粟散王聖徳太子奉讃』に114首、と多くの和讃が伝えられています。

当時、「聖徳太子は観音菩薩の生まれ変わりである」とする考えがあり、また、一方で、親鸞は観音菩薩の化身であるとする見方があったことが、影響を与えていたようです。親鸞が観音の化身であるという説は、親鸞の生前からあったようで、妻の恵信尼の書状の中に既に語られています。このようなこともあったのでしょう、親鸞は、太子信仰を強く持っていました。此处では『正像末和讃』『皇太子聖徳奉讃』の中のいくつかの歌を簡単に紹介したいと思います。なお、歌の中に登場する「たた」「あま」という語は父、母のことです。

救世観音大菩薩 聖徳皇と示現して 多々の如くすてずして 阿摩の如くにそひたまふ 無始よりこのかたこの世まで 聖徳皇のあわれみに 多々の如くにそひたまひ 阿摩のごとくにおはします 大慈救世聖徳皇 父の如くにおはします 大悲救世観世音 母の如くにおはします 和国の教主聖徳皇 廣大恩徳謝しがたし 一心に帰命したてまつり 奉賛不退ならしめよ 上宮皇子方便し 和国の有情をあはれみて 如来の悲願を弘宣せり 慶喜奉賛せしむべし

聖徳太子は和国の教主と仰がれ、日本仏教の基を築かれた方であることが詠われています。日本の各地に、太子堂と呼ばれる聖徳太子をお祭りしたお堂があり、また太子の命日

とされる2月22日には「太子講」と呼ばれる講が行われています。このように、聖徳太子に対する信仰は、親鸞を介して浄土真宗の信仰の中に、自然と入っていることが分かります。

さて、故風間真一様と私の最初の出会いは、私がまだ大学院の博士課程の学生であった時でした。研究室の末本文美士先生、本日、一緒に参りました斉藤仙邦先生も、実はそのとき同行しておりました。丙申堂、釈迦堂を見学し、ご自宅にもお伺いさせていただきました。その後、小生は愛知県の愛知学院大学に奉職し、しばらく東大を離れていたのですが、二年半ほど前に再びご縁を頂戴し、東京大学に戻りました。

真一様は、東京大学在学中に文学部印度哲学仏教学科の講義を聴講され、感銘を受けられたということを伺っております。克念社の代表を務められ、その当初から現在までも、東大の印度哲学仏教学研究室に、変わらぬご支援を賜っておりますこと、篤くお礼を申し上げます。お聞きしましたところでは、戦前、克念社を創設されましたお父様は、常磐大定先生と親交があり、それを機縁にされたのでしょうか、日本仏教の講座を東大文学部の中に設置するために、多額の寄付金をなされておられたと伺っております。それが戦中・戦後のハイパーインフレの中で講座の設置が実施できず、今に至っていることが悔やまれます。

風間真一様は、きっと今頃、お浄土で、幾星霜流れたことを実感しつつ、また、阿弥陀様のお膝元で、安楽な日々をお過ごしのことと思います。いつかはまた、こちらの世界に還相してくださる、すなわち、お帰りになってくださることを念じつつ、三回忌の簡単な講話とさせていただきます。

(平成24年11月16日、風間真一様三回忌追悼講話の原稿を加筆修正したものです。)

みのわ けんりょう 東京大学大学院教授